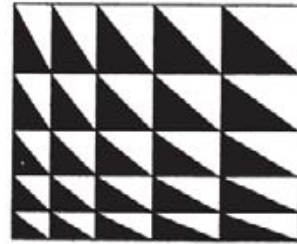


# モノグラフ・高校生'84

## vol.12 高校部活動、いま

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智禧・和田京子・遠藤純子  
高校教育研究会/深谷昌志(放送大学教授)・武内 清・明石要一  
石崎康義・仁平正男・瀧生真紗雄・尾澤弘恒・穂坂明德・田中雅文



見本

### 目次

はじめに……………	2	第VI章 部活動と学校生活……………	40
第I章 調査の概要と各章の要約 ……	4	1 学校生活への参加度と充足感……………	40
1 調査の概要……………	4	2 卒業後の進路選択……………	49
2 各章の要約……………	6	第VII章 運動部の生徒たち……………	52
第II章 高校生の部活動の実態 ……	9	1 運動部員のプロフィール……………	52
1 はじめに……………	9	2 高校生から見た運動部員……………	62
2 部活動への参加状況・活動状況……………	10	3 運動部活動がもたらすもの……………	66
3 部活動への期待と悩み……………	15	第VIII章 高校の部活動のあり方を めぐって ……	67
第III章 部活動における教師・ 生徒関係 ……	19	1 はじめに……………	67
1 部活動顧問の姿……………	19	2 部活動に熱心な生徒たち……………	68
2 部活動と教師・生徒関係……………	22	3 部活動が生活時間に及ぼす影響……………	70
第IV章 高校と中学の部活動の比較……………	26	4 部活動が行動経験や自我像に 及ぼす影響……………	73
1 はじめに……………	26	第IX章 部活動に不参加の生徒たち ……	77
2 高校の部活動と中学の部活動は どこが違うか……………	27	1 部活動不参加者のプロフィール……………	78
3 高校入学後、どのように 部活動にかかわっていくか……………	30	2 なぜ部活動に参加していないか……………	79
第V章 高校生にとって部活動とは……………	33	3 どんな学校かで学校生活の 意味が異なる……………	84
1 部活動に関する意見対立……………	33	まとめに代えて ……	89
2 私立校と公立校の部活動……………	35	資料1 調査票見本 ……	92
3 部活動と勉学……………	35	資料2 基礎集計表 ……	106
—その両立をめざして—			
4 甲子園児をどう見ているか……………	37		
5 もしわが校が甲子園に出場したら……………	38		

# 「はじめに」●

これまで、私たちはさまざまな角度から現代の高校生の姿や高校教育のかかえる問題を明らかにしてきた。しかし、高校教育や生徒文化を考えると、かなりのウエイトを占めるであろう部活動（必修クラブを含めない）はまだ本格的に研究していない。確かにこれまで断片的には扱っていたが、高校生活の中で部活動がどんな意味をもっているかを、トータルにとらえてはいなかった。

とはいえ、高校の部活動をとらえるのは難しい。例えば甲子園をめざし早朝練習や長期の合宿もいとわず練習に励む部があるかと思えば、練習日も決まらず、いわゆるユレー部員を多くかかえ、部としての活動がままたぬ部もある。そしてこうした活発な部と不活発な部は、同じ学校の中でも生じている。

また、部活動のあり方は学校側の姿勢によって異なってくる。学校が部活動に力を入れ、すぐれた選手を入学時から特別扱いにしたり、設備や施設を整え有能な指導者を配置し、全国大会をめざすところさえある。かくて部活動の種類は「学校数×部」の数ほどあり、部活動一般を論じるのは難しいといわれる。

しかし、高校の部活動は、勉強と両立すべきか、全国大会の出場をめざすべきか、それとも楽しければよいかという問いは、今なお古くて新しい。したがって、本研究はそうした困難さを念頭におきながら、大学受験に力を入れている学校と、部活に力を入れている学校を対象とし、高校の部活動が問われているテーマにせまろうとするものである。

具体的にはまた、部活動を熱心にやっている生徒や部活動に参加していない生徒にとって、部活動はどんな意味をもっているか、を明らかにしたい。

調査の実施と刊行にあたって、福武書店の全面的なご協力を得た。福武書店教育研究所の加藤智禧所長、和田京子氏、遠藤純子氏に深く感謝したい。最後になったが、調査にご協力いただいた生徒、先生方に心からお礼申し上げる。

昭和59年6月

## 調査の企画

### 高校教育研究会

- 代表 深谷 昌志 (放送大学教授)  
武内 清 (武蔵大学教授)  
明石 要一 (千葉大学助教授)  
石崎 廣義 (私立城北高校教諭)  
仁平 正男 (都立八王子東高校教諭)  
蒲生真紗雄 (都立武蔵高校教諭)  
尾澤 弘恒 (都立荻窪高校教諭)  
穂坂 明德 (神奈川県立平安高校教諭)  
田中 雅文 (三井情報開発研究員)  
耳塚 寛明 (東京大学助手)  
樋田大二郎 (東京大学大学院)  
苅谷 剛彦 (東京大学大学院)  
吉本 圭一 (東京大学大学院)  
前田 一美 (日本女子大学研究生)

### 本書の執筆分担

- 明石 要一 はじめに、I章、IX章、まとめに代えて  
尾澤 弘恒 II章  
穂坂 明德 III章  
石崎 廣義 IV章  
仁平 正男 V章  
蒲生真紗雄 VI章  
田中 雅文 VII章  
武内 清 VIII章

# 第 I 章 調査の概要と各章の要約



## 1. 調査の概要

本調査の実施状況とサンプルの特性は次のとおりである。

### (1) 調査対象

調査対象は、都内公私立高校9校に在学する高校2年生計2,584人である。

高校における部活動について一般的に論じることが難しい。高校では部活動に対する学校の位置づけは、いっそう異なる。特定の部に力を入れ人材と費用を投入し、全国大会で名をあげようとするところから、部費も少なく指導者の技術もままならないところまで、それこそさまざまな学校がある。

こうした高校の部活動の実情の背景には、

多くの要因が絡んでいる。しかし、その中でも大学進学とスポーツに対する学校の考え方の違いが、部活動のあり方に大きな影響を及ぼすと考えられる。したがって、今回の調査は都内の高校に限定し、大学進学やスポーツの部活動に力を入れている学校を中心にサンプリングした。

対象校は、私立でスポーツに力を入れている学校2校、私立で大学進学に力を入れている学校3校、そして公立で大学進学に力を入れている学校3校、それに公立で大学進学にあまり力を入れない学校1校である。

(2) 調査時期 昭和58年10月～11月

### (3)調査方法

質問紙による自己記入法調査（巻末調査票見本を参照のこと）。

### (4)分析サンプルの属性別構成

（総数2,584名、不明は省略）

#### ・性別

男 子	女 子
1,878名	706名
72.7	27.3 (%)

#### ・学校のプロフィール (%)

学 校 種 別	学 校 名	学校創設年	男子の比率	59年東大 合格者数	私 立 大 希 望 者	国 公 立 希 望 者	全国大会 出 場 率	サンプル数
私 立 ス ポー ツ 校	A 1	S 18年	56%	0人	46.5%	9.5%	59%	402人
	A 2	S 23年	100%	1～10人	78.5%	12.3%	53%	638人
私 立 進 学 校	B 1	S 16年	100%	1～10人	29.0%	62.9%	25%	248人
	B 2	S 16年	100%	30～40人	22.8%	66.9%	39%	149人
	B 3	M 24年	100%	10～20人	13.4%	83.5%	6%	127人
公 立 進 学 校	C 1	S 51年	47.2%	1～10人	19.8%	70.1%	5%	320人
	C 2	S 15年	46.9%	1～10人	21.8%	67.8%	15%	243人
	C 3	S 15年	56.1%	30～40人	17.5%	72.0%	13%	212人
公 立 非 進 学 校	D 1	S 53年	48.2%	0人	21.3%	13.5%	3%	245人

#### ・部活動の参加状況 A (高校) (%)

運動部熱心	運動部不熱心	文化部熱心	文化部不熱心	途中退部	参加した ことはない
27.0	11.7	10.3	8.4	24.6	18.0

#### ・部活動の参加状況 B (中学校時代) (%)

運動部熱心	運動部不熱心	文化部熱心	文化部不熱心	途中退部	参加した ことはない
48.8	21.4	7.9	5.1	11.0	5.8

## 2. 各章の要約

### 第II章 高校生の部活動の実態

- (1) 高校生は入学当初約8割の生徒が何らかの部に入る。2年後半までには2割の者がやめ、参加率は57%となる。
- (2) 部参加の内訳は、運動部39%（熱心27%、不熱心12%）と文化部18%強（熱心10%、不熱心8%）と運動部が主流である。
- (3) 部活動をやめる者は私立校では1年生の当初に多く、公立校では1年の3学期以降に多い。
- (4) 週の活動日数が6日以上は文化部の4分の1に対し、運動部では9割に達し、運動部と文化部で活動時間の差は大きい。
- (5) 同じ運動部でも公私立の差がある。公立校の平日の活動時間は2時間以内、休日は活動しないが多いのに対し、私立校は平日の活動時間は3時間以上、休日も活動日である。公立の生徒は日頃の練習不足を夏休みに補っている。
- (6) 部活動へは「好きな技術や能力をのびしたい」「親しい友人をつくりたい」という期待を持って入り、充足感としては、「技術や能力」は少し落ちるものの、親しい友人の他に先輩や教師との接触が期待以上に得られたとしている。
- (7) 部活動の最大の悩みは、部活動に時間をとられ、勉強や遊びや休息や交際ができないということである。特に運動部熱心な生徒の自由な時間への渴望は強い。しかし彼らは悩みつつも、部活動に一番充実の時を過ごしている。

### 第III章 部活動における教師・生徒関係

- (1) 生徒は部活動の顧問には必ずしも満足していない。練習にはできるが、指導技術はうまくなく、練習後のつきあいも少ない。そして、顧問は、一般教科53%、体育34%の教師が中

心で、年齢は30歳台が多い。

- (2) 私立スポーツ校の顧問は、指導技術うまく熱心であるが、生徒の不満は高い。また私立進学校は、顧問の指導技術や熱心さはどちらともいえないが満足度は高い。そして公立進学校の顧問は、技術や熱心さは劣るが満足感をもたれている。
- (3) とはいえ、部活動に熱心に参加している者は、一般に顧問を高く評価し満足している。他方不熱心な者は、評価も低く満足していない。
- (4) また親や担任教師の部活動に対する姿勢は「ほどほど」が主流である。しかし、勉強と両立させている生徒には、親や教師も「がんばれ」とはげましている。

### 第IV章 高校と中学の部活動の比較

- (1) 中学時代の部活動と高校時代の部活動には関連がある。中学時代に運動部に入っていた生徒は高校でも運動部へ、文化部に入っていた生徒は文化部へ入る傾向がある。
- (2) 中学の部活動に比べ高校の部活動は、部員にやる気があり、しっかりしたコーチがいて、練習が厳しいと生徒たちは評価している。
- (3) また高校の部活動には就職や進学に有利になるというメリットがあるが、勉強との両立は難しく、部活動にはお金がかかりすぎるという悩みもかかえている。
- (4) 高校のレベルでは、部活動の学校差も大きい。全国大会出場をめざし部活動中心の生活を送る高校生から、マイペースで部活動を楽しむ高校生まで、その活動状況は千差万別である。

### 第V章 高校生にとって部活動とは

- (1) 高校の部活動のあり方として次の3つ、つまり「実力で代表者を選ぶ」「楽しくやること」が第一、「勉強との両立をはかる」が基本で

あると高校生たちは考えている。

- (2) 私立高校の生徒は、「国体やインターハイの代表をめざすべき」「実力で代表者を選ぶ」「卒業まで続けるべきだ」と部活動への強い没入に賛成が多く、部活動に楽しさより厳しさを求めている。
- (3) 「私立スポーツ校」には勉強と部活動の両立意識の希薄な者が多く、それらの生徒は家での勉強時間も30分以内と短い。
- (4) 自分の学校が甲子園に出場したら、入学希望者がふえ、学校生活が生き生きしてくるよさがある一方、予算やグラウンド使用などで野球部員の特別視が心配という声が目立つ。
- (5) 甲子園野球はもはや高校生の部活動の延長線上にはなく、特別仕立ての部活動とみなされている。

#### 第VI章 部活動と学校生活

- (1) 授業への取り組みは、部活動の参加状況よりも、家庭での勉強時間の多少によって変わる。ところが、学級、学校での活動では、参加状況が意味をもつ。
- (2) 運動部の熱心者は、クラス内の係や委員会には消極的であるが、ホームルーム、学校行事などの集団としての活動は、おおむね参加している。不参加者は、これらの活動をさぼっている。したがって文化部の者が学級・学校の役割を担っている。
- (3) 学校生活の充足度は、友人とのつきあいを除いて全体的に低い。しかし、運動部で熱心な者は、友人はもとより、異性、教師との関係においても一番充足感が高い。しかもレギュラーは、ホームルーム、生徒会活動でも充足感が高い。文化部員は、これと対照的な位置にある。
- (4) また、学校生活の充足度は、家庭での勉強時間の多少によっても変わる。全体的にみて、異性との交際を除いて部活動と勉強を両立している者や、勉強を優先させている者の充足感が高い。すなわち、学校のフォーマルな文化（授業、部活動）に意欲的に取り組む者ほど、学校生活が生き生きしている。

#### 第VII章 運動部の生徒たち

運動部にはいつて活動することは、生徒に何をもたらしているか。

- (1) 多忙な生活——レジャーや交際にかかる時間がとれないなど多忙感が高くなる。実際の生活でも、アルバイト、旅行、映画は不参加者より体験が少ない。
- (2) 高い充実感——部活動への満足感が高い。おそらく厳しく苦しい練習に耐えることも、満足感を高める要因の1つと思われる。また、学校生活全体を見ても、人間関係の側面でも運動部員は充足感が高い。
- (3) 人間形成への影響——運動部員は自己評価が高く、自分に自信を持っている。高校生全体からも性格や人間関係について高く評価されている。ただし、時代即応的な点ではやや評価が下がる。

以上のことは、運動部員の中でも熱心に活動している者について、特にあてはまる。



## 第Ⅷ章 高校の部活動のあり方をめぐって

- (1) 高校の部活動のあり方をめぐって、「全国大会派」と「楽しみ派」の意見の対立がある。
- (2) 同じ部活動でも文化部と運動部では、その活動時間や活動内容が大きく違う。また部活動に熱心な生徒と熱心でない生徒の分化は、運動部において顕著である。
- (3) 部活動への中途半端な参加は、好ましい結果を生んでいない。部活動に参加する以上、それに打ち込む態度が大切なことを、データは物語っている。
- (4) 全国大会をめざし部活動一色で高校生活が染まる「私立スポーツ校」の運動部は、練習が厳しく、部員には根性とやる気があり自信を強めているが、一方家での勉強時間は少なく、部活動での実績をもとにした私立大進学を考えている。



- (5) 進学校の運動部員は、勉強との両立に悩みながら、ふだんの練習量は少ないが、夏休みを返上してがんばっている。
- (6) 部活動は高校生の若いエネルギーの発散の場として、また校外での問題行動への阻止要因として、さらに部活以外の分野での自信を強め、受験社会を乗り切る力をつける場として作用している。

## 第Ⅸ章 部活動に不参加の生徒たち

- (1) 部活動の不参加者は、次のような特徴をもつ。①行動体験は幅広く豊富である、②テレビ視聴と家庭での勉強時間が多い、しかし③第一志望で入学した者が少ない、④学校生活での充足度が低い、⑤自分の学校に誇りが持てない、⑥高校生としての自己像が乏しい。
- (2) 中学時代8割を超える者が部活動に参加していた。しかし彼らは今は主に、部活動と勉強の両立に悩み参加していない。そして、私立進学校は大学受験の重みから、公立進学校は部活動の人間関係のわずらわしさから、それに私立スポーツ校は、中学校と高校部活動のイメージの落差から部活動をさける特徴がある。
- (3) したがって、同じ不参加者でもどんな学校に入学したかで学校生活のあり方が異なっている。私立スポーツ校は、行動体験も多く学校での人間関係も充足し、高校生としての自己像も明るい。私立進学校は、行動体験は少ないが「授業」に充足し自己像もかなり明るい。他方、公立進学校は、応援にもいかず勉強時間も少ない。没頭する対象を見いだせなくて生活にメリハリがない。自己像が一番乏しい。



## 第II章 高校生の部活動の実態



### 1. はじめに

6年前に実施された「日米高校生調査」(日本青少年研究所、1979年)によると、「部活動は何のために重要だと思うか」という質問に対して日米の高校生とも「自分の得意な分野の知識や技術を高める」「友人や先輩との交流を深める」「レクリエーションや気ばらし」として重要という3つの側面を強調していた。さらにアメリカの高校生は「大学入学に有利になる」(米55.6%、日本9.2%)、「社会的奉仕活動」(米56.9%、日本17.1%)というメリットもあげていた。

それから6年たった現在日本の高校生たちは、部活動にどのような意義を考え、どのような部活動への参加形態をとっているのであ

ろうか。甲子園、国体、インターハイといった全国大会での活躍をめざして部活動に打ち込む運動部の生徒がいる一方、趣味程度に好きなスポーツや文化部の活動をする生徒もいる。また部活動にうまくなじめなかったり、勉強との両立に悩み部活動をやめていった生徒も少なくない。

本章では、東京都内の9校の高校2年生を対象にした調査から、部活動の実態と意義を明らかにする。第I章に示されているように、今回の調査対象校には、公立(4校)と私立(5校)が含まれており、また同じ公立でも進学校と非進学校がある。また同じ私立でもスポーツ校と進学校がある。したがって、学校

種別による分析も興味深い。

次のような2つの節に分けて考察を加える。

- 部活動への参加状況・活動状況
- 部活動への期待と悩み

## 2. 部活動への参加状況・活動状況

### (1)部活動への参加状況

高校に入学した生徒たちは、どの部に入るかを大変楽しみにしている。最初8割近くが何らかの部に入部する。しかし2年生の後半には、3割の生徒がやめ、参加率は57%となる。その内訳は、図II-1のごとくである。

運動部への加入率39%（熱心27%、不熱心12%）

文化部への加入率18%強（熱心10%、不熱心8%）

運動部で活動する生徒が文化部で活動する生徒の2倍いて、熱心な生徒も運動部に多く、高校の部活動の主流が運動部にあることがわかる。

公立（都立）と私立を比べてみると、参加率は公立71%、私立49%（特に運動部への加

入率、公立50%、私立31%）と公立の参加率が私立より高い。これは都立高校には昔から部活動を奨励する伝統が存在するせいもあろう。他の道府県の公立高校も同様とは限らない。都道府県による差があるはずである。

今回調査対象の私立高には、甲子園や国体・インターハイで有名な「私立スポーツ校」（2校）と、一流大学への進学で有名な「私立進学校」（3校）が含まれている。前者の運動部には運動能力の素質のある生徒が多数入部するが、練習が厳しく、途中で退部する生徒も多い。選手としてのポジション獲得競争に敗れ、あっさりと部を去っていく現代っ子もかなりいると思われる。

性別でみると、男子に「最初から部に入ら

図II-1 部活動への参加状況

	文化部に						(%)
	運動部に熱心に参加	運動部にあまり熱心ではない	熱心に参加	あまり熱心ではない	以前は参加現在は不参加	参加したことはない	
全 体	27.0	11.7	10.3	8.4	24.6	18.0	
私 立	23.3	7.9	9.9	7.4	28.2	23.7	
公 立	32.3	17.4	10.9	10.1	19.2	10.1	
男 子	27.5	9.8	9.7	7.3	24.6	21.1	
女 子	25.4	16.7	12.0	11.4	24.5	10.0	

なかった」生徒が相対的に多く、女子に「運動部に入っているが不熱心」という生徒が多いという差も見られる。女子は単独で行動することが少なく、「友だちが入ったから何となく自分も同じ部に入る」というケースも見られる。

## (2)部をやめる時

1年生のはじめに部に入ったけれど、2年生の後半にはやめた生徒が25%いる。その生徒たちがやめた時期は、私立と公立では大きく違う。(図II-2)

私立校の生徒がやめるのは、1年生の最初の頃である。部活動の厳しい練習についていけない生徒や部の雰囲気になじめない生徒が続出するせいであろう。後に(第IX章)詳述するが、私立校の生徒は現在部活動に参加しない理由として「練習内容が厳しすぎるし、活動時間が多すぎる」(私立30%、公立21%)、「勉強と両立しそうにない」(私立34%、公立27%)、「通学に時間がとられる」(私立25%、公立13%)を多くあげている。

一方公立校の生徒は、入学当初はあまり退部することがなく(それだけ練習も厳しくなく、自由な雰囲気があるのだろう)、1年の3学期頃から、やめる生徒が出はじめる。(部に

参加しない生徒についての考察は、(第IX章)参照)。

## (3)活動状況

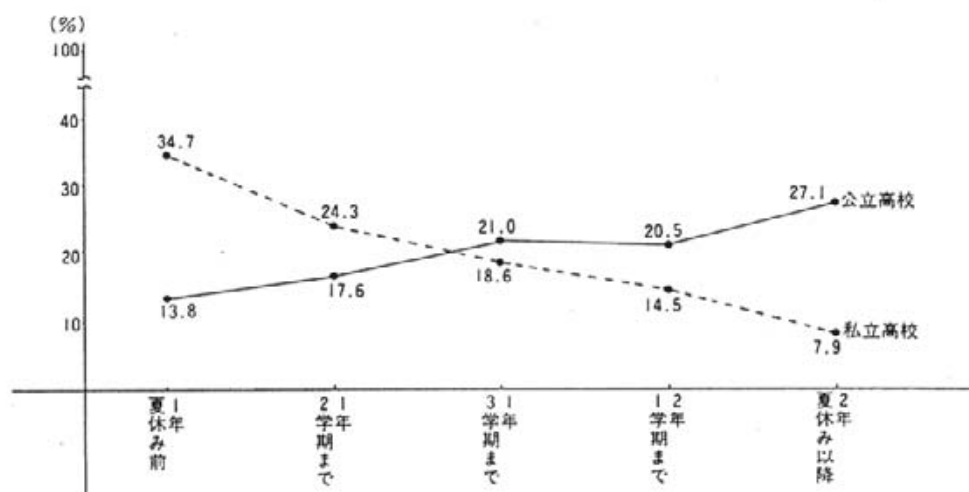
では次に、部の日頃の活動状況について見てみよう。

1週間の活動日数は、運動部と文化部では大きく違い、また運動部の学校差もかなりある(図II-3)。

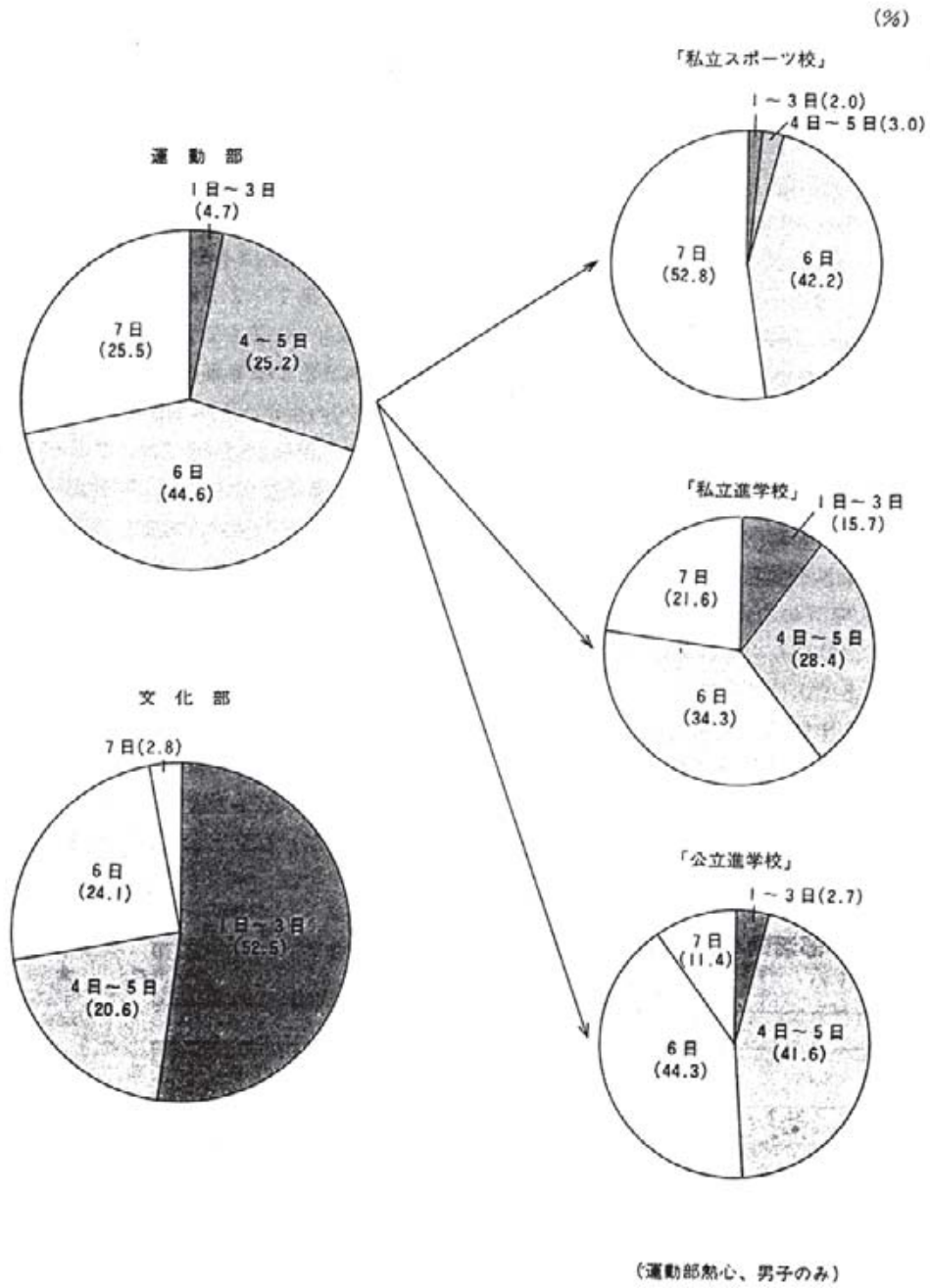
文化部では活動日が週1~3日程度が約半数で、週6日以上は4分の1しかないのに対し、運動部は週1~3日程度は5%弱で、6日以上が7割近くに達する。さらに運動部を学校種別(詳細は第I章参照)にみると、公立とも「進学校」の生徒が週6日が多いのに対し、「私立スポーツ校」の生徒では週7日が5割を超え、一番多くなっている。運動部の生徒は学校種別を問わず学校のある日は毎日練習があり「私立スポーツ校」の生徒は、休日も練習や試合でほとんどつぶれるという生活を送っているのである。

平日の練習時間も、表II-1のように、公立校では2時間ぐらいが多い(公立73%、私立55%)のに対して、私立校では3時間+4時間以上が公立より2倍多くなっている(私立30%、公立14%)。私立と公立の活動量、練習量

図II-2 部活動をやめた時期(公私立別)



図II-3 1週間の活動日数



の差が活動時間にもはっきりあらわれている。

日曜日・休日に、ほぼ毎回活動は、文化部の生徒の1%に対し、運動部の生徒の35%(私立スポーツ校70%、私立進学校32%、公立進学校15%、いずれも男子)と多くなっている。休日は「ぜんぜん活動しない」が、運動部の17%に対し、文化部では49%となっている(表II-2)。

早朝の練習・活動は、「している」15%(運動部19%、文化部6%)、「していない」85%(運動部83%、文化部94%)と、あまり行われて

いない。

夏休みは表II-3のように、「運動部に熱心」な生徒の活動の場になっていることがわかる。公立の運動部の生徒も日頃の練習不足を夏休みにとりもどそうと、「私立スポーツ校」の生徒に負けない練習をくりひろげていることが注目される。

部活動への出席は「毎回+ほとんど」出席が4分の3を占めるが、半分以下出席の生徒も「運動部不熱心な生徒」(53%)や「文化部」生徒(36%)にかなり見られる(表II-4)。

表II-1 平日の練習時間

(%)

属性 \ 尺度	30分位	1時間位	2時間位	3時間位	4時間以上
全 体	4.0	10.5	63.9	18.3	3.3
私 立	7.5	8.5	54.9	24.5	4.6
公 立	0.6	12.6	72.8	12.0	2.0
運動部で熱心に活動	0.8	6.5	67.7	21.7	3.3
運動部であまり熱心でない	1.8	13.1	67.0	15.6	2.5
文 化 部	10.7	15.7	55.9	15.5	2.2

表II-2 日曜・休日の活動

(%)

属性 \ 尺度	ほぼ毎回	半分ぐらい	ときどき	あまりない	ぜんぜんない
全 体	19.1	10.3	20.9	17.7	32.0
私 立	30.5	8.1	17.7	13.5	30.2
公 立	7.5	12.5	24.2	22.1	33.7
運動部で熱心に活動	34.6	16.3	20.4	12.2	16.5
運動部であまり熱心でない	8.3	7.2	20.9	21.3	42.3
文 化 部	1.4	2.8	21.8	25.5	48.5

表II-3 夏休みの活動

(%)

属性 \ 尺度	ほぼ毎日	3週間以上	2週間位	1週間位	ときどき
全 体	36.8	30.1	19.6	7.6	5.9
私 立	39.8	23.7	16.5	11.4	8.6
公 立	34.0	35.9	22.4	4.2	3.5
運動部で熱心に活動	51.2	34.5	10.8	2.9	0.6
運動部であまり熱心でない	25.1	37.3	26.2	7.6	3.8
文 化 部	18.2	16.8	31.8	15.9	17.3

表II-4 部活動の出席状況

(%)

属性 \ 尺度	毎回出席	ほとんど出席	半分ぐらい出席	ほとんど出席しない
全 体	38.8	35.3	12.0	12.9
私 立	46.3	32.7	9.3	11.7
公 立	31.0	39.9	14.9	14.2
運動部で熱心に活動	59.5	35.2	4.1	1.2
運動部であまり熱心でない	11.6	35.3	23.1	30.0
文 化 部	24.5	39.2	17.1	19.2

#### (4)過去5年間の部の実績

所属している部が過去5年間に全国大会(国体、インターハイ、甲子園など)に出場したかを尋ねてみた。全国大会に出場するためには、地区レベル、都府県レベル、関東レベルの大会で優秀な成績を修めていなければならない。全国大会出場は公私立別では、私立47

%、公立9%とかなり差がある。参加の熱心度別では、運動部熱心33%、運動部不熱心18%という差がある。学校類型別(運動部熱心：男子のみ)では、「私立スポーツ校」63%、「私立進学校」18%、「公立進学校」10%という差がある。公立と私立(特に「スポーツ校」)では、同じ高校生の部活動でもレベルがかなり違うことがわかる。

### 3. 部活動への期待と悩み

#### (1)部活動への期待と充足感

図II-4は、高校生が部活動に参加した時、何を得心と期待したかと、実際部活動から何を得心か(それぞれ、「とても+かなり」の割合)の両方を部活動別にみたものである。

部活動への期待は「好きなことの技術や能力をのばしたい」(全体では77%)、と「親しい友人をつくりたい」(全体で72%)の2つが圧倒的に多い。

運動部では、それに「体力をつけたい」(84%)と「根性を身につけたい」(79%)が加わる。

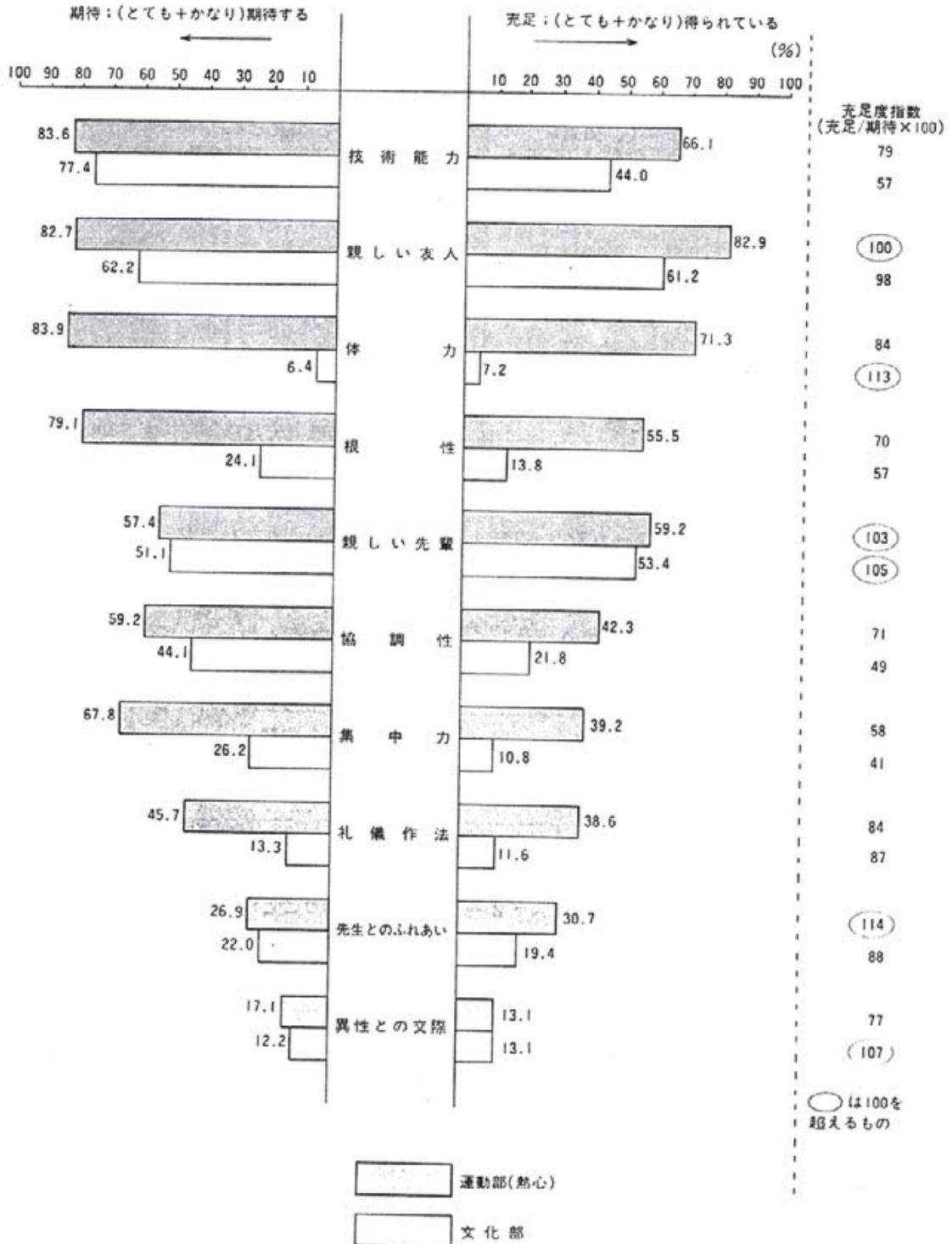
部活動で得られたことは、「親しい友人ができた」(全体では70%)、「親しい先輩ができた」(53%)といった人間関係面がベスト2で、3位に「技術や能力が向上した」(52%)

が入る。

充足度指数(充足感/期待度×100)でみると、「親しい友人」「親しい先輩」「先生とのふれあい」「礼儀作法」といった人間関係面での充足率が高いことがわかる。

このように高校生が部活動に何を期待し、何が得られているかを見てみると、技術的なもの、体力的なものを求めて部活動に参加してきているが、実際に部活動をする中でそれらの特性ももちろん得られているものの、「よき友」、「よき先輩」、「よき師」という人間的な出会いを経験していることがかなり強く出ている。したがって上級生、教師の指導が正しく反映されていけば、部活動参加の意味は学校生活の中で相当大きなものとなっていくであろうことが予想できる。

図II-4 部活動に対する期待と充足(部活動別)





## (2)部活動における悩み

部活動に関する悩みを10項目にわたって質問した。そしてそれと関連する意識をみたのが表II-5である。

全体的には高校生たちが時間の不足に一番悩んでいることがわかる。部活動に時間をとられ「遊び」や「勉強」や「休息」、「交際」ができないという悩みが強く意識されている。それは特に「運動部に熱心」な生徒についてい

える。「運動部に不熱心」な生徒や「文化部」の生徒は、上記の悩みはそれほど深刻ではない。「運動部に不熱心」な生徒は「技術がのびない」という悩みをかなりもっている。

「運動部熱心」な生徒は、部活動はかなり厳しく「苦しく」「帰宅後疲れている」が同時にかなり「楽しく」、部活動全体に「満足している」という充実感を感じている。

「運動部不熱心」や「文化部」の生徒は、部活動に対する悩みもあまりない代わりに満足

表II-5 部活動における悩み

(%)

項目	属性		男子	女子	運動部熱心	運動部不熱心	文化部	
	全体	私立						公立
1.遊ぶ時間がない	40.2	44.2 >	36.2	40.9	38.8	53.5 >	38.3 >	20.3
2.勉強する時間がない	32.9	31.8 <	34.1	33.3 >	22.0	42.9 >	28.1 >	19.3
3.休日、ゆっくり休息できない	31.5	37.4 >	25.4	33.6 >	26.9	47.2 >	24.2 >	10.4
4.技術がのびない	26.7	22.9 <	30.6	23.4 <	34.1	25.1	36.8	24.0
5.異性と交際ができない	20.0	30.5 >	9.3	25.8 >	6.7	26.4 >	17.5 >	10.6
6.先輩がいばりすぎる	14.3	21.1 >	7.3	17.8 >	6.4	19.6 >	10.2 >	7.4
7.監督が正しく評価してくれない	11.2	14.9 >	7.2	12.5 >	8.2	12.7	13.3	5.9
8.親が理解してくれない	9.7	8.8 <	10.6	10.0	8.9	10.1	4.4	12.7
9.家族団らんの時間がない	7.8	9.7 >	5.7	8.8	5.2	9.3	5.9	5.4
10.練習についていけない	5.8	6.4 >	5.2	6.2	5.1	6.8	5.9	3.4
11.帰宅後「とても+かなり」疲れている	41.1	43.5 >	38.7	43.1 >	36.5	55.8 >	38.4 >	19.8
12.部活動は「とても+かなり」厳しい	29.7	36.4 >	22.9	34.1 >	19.8	47.7 >	27.1 >	7.6
13.部活動は「とても+かなり」苦しい	34.2	37.8 >	30.4	38.5 >	24.2	53.6 >	21.4 >	10.8
14.部活動は「とても+かなり」楽しい	53.4	52.0	54.9	54.9	50.2	65.3	29.6	52.2
15.部活動に「とても+かなり」満足	36.3	35.7	37.1	38.1	32.3	49.5	15.3	29.0

度もあまりない。

大いに悩み、大いに感動している、若者らしいのは運動部に打ち込む生徒たちであるといえることができる。

限られた時間の中で自分の生活時間をどのように組み立てていくかということはおとなでも難しいことであるが、遊びたい盛りの高校生たちであり、また、受験のための勉強が

必要な中で、一体部活動に費やす時間はどの程度が適当なのか、また何かを犠牲にして部活動を続けていく方がよいのかは、生徒の特性、環境などさまざまな要因もあり一概にはいえない。それだけに悩みをもつ生徒への親や教師の適切なアドバイスが必要であると思われる。

## 第III章 部活動における教師・生徒関係



### 1. 部活動顧問の姿

高校の部活動は、ある意味での異年齢集団によって、共通する興味に関心をもって、自主的、自発的に行われるところに特色がある。当然そこには、指導者としての顧問教師もいるわけであるが、基本的には部員同士の話し合いや、協同・連帯を通して問題解決をはかりながら、活動を遂行することになる。では、部活動における教師と生徒のかかわりは、どのようなものになるのであろうか。

まず、部活動を通して顧問教師に課せられる機能を整理すると、①専門的知識、技能の伝達・指導、②クラブ運営の調整・助言、③部員の悩みやつまずきの相談・解決等、ということになる。

そして学級担任や教科担当者と異なり、あくまでも生徒のvoluntariness(自発性)を土台として成り立つのが、部活動における教師・生徒関係の特質であることを、まず指摘しておきたい。さらに上記3つの機能は、甲子園や全国大会に出場するような名門スポーツ・クラブなどの場合には、それぞれに顧問を配置して機能的な分化をはかることがあるが、一般の高校では、中心になる顧問教師がこれらの包括的な機能を体現することになる。部活動の中で出会う顧問と部員、それは学校におけるもう1つの型の教師・生徒関係である。

とはいえ、いま部活動に参加している生徒

にとって、部活動には満足していても、部活動をリードする顧問には必ずしも満足感をもっていないようである。図Ⅲ-1は、部活動と顧問に対する満足感を比べた結果である。

部活動そのものに満足している者は64%であるが、顧問の先生に対しては、ちょうど半数の50%が満足感をもっているだけで、いうならば二人に一人は不満をかかえていることになる。

では、実際にどのような人が部の顧問についているのかをきいてみると、表には示していないが、当然ながら「自分の学校の先生」(85%)が圧倒的である。しかし「卒業生」(10%)がなっているところも若干あるようである。

表Ⅲ-1は、現在ついてい「あなたの部の顧問の先生(二人以上いるときは、熱心な先生)」について、調べた結果を示したものである。

特徴的な傾向をまとめると、技術指導はうまいとはいえない(うまい34%<うまくない43%)が、練習にはまあつき合ってくれる(出席69%>出席しない31%)。けれども、外にいったとき、飲みものなどをおごってくれるほどの親密なつき合い方はあまりない。なお、顧問には一般教科53%、体育34%の割合で選ばれ、また年齢的には30代の教師が主翼をになっていることが明らかになっている。

生徒の個性や興味に基づく部活動は、それを通して生徒が単に知識を獲得したり、技術

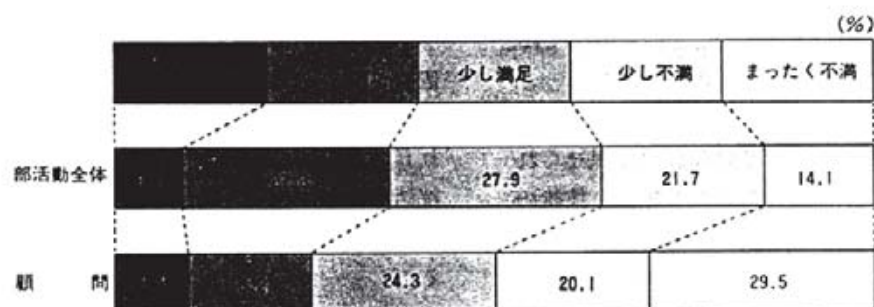
を習得したりするにとどまらず、広く教育活動として、高校生活を豊かに、充実させる上で必要不可欠のものになっている。そして部活動に対する学校や教師、親の考え方や態度は、活動の水準・レベルや生徒の部活動に取り組む姿勢を規定してくるものと思われる。表Ⅲ-2は、学校のタイプによって、部活動の評価にどのような差があらわれるかを見たものである。学校のタイプは、調査対象校の中から私立スポーツ校(全国大会出場の部を有し、運動に力を入れている)、私立進学校(大学進学率が高い)、公立進学校(同前)を分類して選んだ。

まず私立スポーツ校は、顧問の指導技術や練習への熱意は高いにもかかわらず、顧問への不満は強い。むしろ担任も親も部活動に対しては、大いに奨励している。

つぎに私立進学校では、対照的な2つのタイプの顧問が見られる。1つは、技術もうまく、練習に熱心であり、生徒からも満足感をもたれている顧問である。こうした学校では担任も部活動をすすめ、勉強との両立をめざしている。もう1つは、まったく正反対に、技術はうまいとはいえず、練習への熱意も低い顧問のタイプで、担任も部活動に対しては消極的であり、勉強中心になっている。

最後に公立進学校では、顧問の指導技術は決してうまくなく、また練習への参加も私立ほどには高くないが、顧問としては満足感をもたれている。親は部活動に対して消極的

図Ⅲ-1 部活動への満足感



あるが、担任はきわめて積極的な姿勢をもつタイプと消極的なタイプに分かれている。

以上に見られるように、生徒の顧問に対する評価を通してみると、学校のタイプによっ

て顧問のあり方にも特徴的な傾向がある。そしてこのことは、教師と生徒の基本的な関係にもあらわれてくると思われる。

表Ⅲ-1 あなたの部の顧問は？

(%)

担当教科	英・国・数・社・理 (52.5)	体育 33.9	音・美 8.8	その他 4.8
年齢	20台 14.2	30台 (42.9)	40台 31.7	50歳以上 11.2
技術評価	うまい {とても 14.7 かなり 19.3} 34.0	うまくない {あまり 12.5 ぜんぜん 30.2} (42.7)	どちらでもない 23.3	
練習参加	出席 {いつも 15.7 かなり 19.7 たまに 33.5} (68.9)	出席しない 31.1		
外で飲みものなどごちそうになることがある	あ る {よ く 4.2 ときどき 16.5 1度は 21.2} 41.9	ない (58.1)		

表Ⅲ-2 学校のタイプと教師・親の部活動評価

(%)

		顧問の技術は		顧問は練習に		顧問に		担任は		親は	
		うまい	うまくない	出席	出席しない	満足	不満	はげます	ほどほどに	全力でがんばれ	ほどほどに
私立スポーツ校	A1	39.5	> 34.3	(81.1)	> 18.9	39.6	< (60.4)	(49.2)	> 18.3	45.0	45.6
	A2	42.6	> 26.8	77.5	> 22.5	51.2	48.8	48.0	> 21.6	(50.9)	> 42.5
私立進学校	B1	(42.6)	> 34.7	(78.7)	> 21.3	71.4	> 28.6	(47.3)	> 17.1	35.6	< 50.7
	B2	25.9	< (53.7)	36.4	< (63.6)	56.4	> 43.6	20.8	< (44.2)	14.5	< 72.7
公立進学校	C1	27.6	< 48.1	52.9	47.1	62.2	> 37.8	(48.3)	> 24.6	26.3	< 61.5
	C2	34.7	38.1	62.4	> 37.6	62.7	> 37.3	(50.7)	> 19.0	32.4	< 64.2
	C3	33.4	< 45.4	70.7	> 29.3	49.2	50.8	25.3	< (34.5)	23.2	< 66.2

## 2. 部活動と教師・生徒関係

### (1)部活動生徒と親、教師

では、部活動をする生徒の側から、親や教師を見てみると、どのように映るのであろうか。

表Ⅲ-3は、部活動に対して学級担任や体育教師そして親の三者が、どのような姿勢でいるのかを比較した結果を示している。

これに見られる通り、部活動に対して積極的なのは、体育教師64%>担任43%>親34%の順序になる。この三者は生徒とそれぞれの立場でかかわることになる。いま、数値を手がかりに部活動に対する三者の絡み合いの心理を解きほぐしてみよう。

まず、親の一般的な心情としては、部活動も「ほどほどに」(57%)してくれなければ、成績にひびいてくると考える。一方、体育教師にとっては、まさに自分の培ってきた技能をフルに発揮できる場であり、またすぐれた能力をもつ生徒を大いに伸ばして、「はげましたい」(64%)気持ちになる。そのはざまに置かれる担任としては、心情的には部活動を「はげましたい」(43%)が、将来の進学(就職)を考える親の気持ちもわからないでもない。やはり部活動は「ほどほどに」(23%)やってもらいたい、というのが正直な気持ちであろう。

けれども部活動に打ち込む熱心さによって、これら三者のはげましの力も強くなるのは明らかである。表Ⅲ-4を見ると、運動部に熱

心な生徒ほど、おしなべて担任からもまた体育教師、親からも、はげましを強く受けていることが知れる。

表Ⅲ-5は、こうした部活動にかかわる姿勢と顧問への満足感をクロスした結果である。

やはり運動部に熱心な生徒ほど、顧問への満足度は高くなっていて(運動部熱心54%>運動部不熱心41%)、不熱心な生徒ほど不満が強くなっている(「まったく不満」熱心26%<不熱心39%)。

顧問に不満であるから部活動にも熱心になれない、という分析の逆の論理も成りたつが、これまで明らかにしてきた文脈からして、部活動における顧問のあり方が、部活動への誘因になり得ることは十分である。とりわけ運動部にあっては一般に、厳しい練習を通して、より高度な技術を獲得していくために、顧問に対して専門的にすぐれた指導者としての資質を求められがちである。

しかし一般的な現状は、表Ⅲ-1に見たように、生徒による顧問への技術評価は必ずしも高くはなかった。教育現場における部活動の指導の最大の困難点は、まさにこうした生徒の高い要求水準と顧問教師との対応のギャップにあると言ってよい。

こうした中であって、親や教師の「はげまし」と、顧問に対する「満足」という二つの要素は、少なくとも生徒の部活離れの阻止要因として機能しているということは言える。

表Ⅲ-3 部活動に対する担任・体育教師・親の姿勢

(%)

	はげましたい	ほどほどにするべき	どちらともいえない	
担任	42.8	22.7	34.5	
体育教師	63.5	8.3	28.2	
	全力でがんばってほしい	成績は下がっても部活がよければ	ほどほどにするべき	すぐやめてほしい
親	33.9	2.2	57.2	6.7

表Ⅲ-4 「はげましたい」気持ち×部活動生徒

(%)

	運動部		文化部
	熱心	不熱心	
体育教師	66.8	> 59.9	57.3
担任	45.3	> 35.6	40.7
親	41.3	> 30.4	23.3

表Ⅲ-5 部活動生徒×顧問への満足感

(%)

属性	尺度				
	とても満足	かなり満足	少し満足	少し不満	まったく不満
全体	9.9	16.2	24.3	20.1	29.5
	50.4			49.6	
運動部熱心	11.3	20.0	22.4	20.3	26.0
	53.7			46.3	
運動部不熱心	7.2	9.8	24.2	20.2	38.6
	41.2			58.8	
文化部	9.0	14.9	27.7	20.3	28.1
	51.6			48.4	

## (2)生徒のタイプと顧問評価

それでは、部活動に熱心に取り組んでいる生徒とそうでない生徒の間に、顧問についてのどのような評価の差異が見られるのであろうか。

図Ⅲ-2は、部活動への出席度と顧問との関係についての評価の結果を示している。

部活動への出席度については、「熱心派」(毎回出席)、「ほどほど派」(半分くらい出席)、「不熱心派」(出席しない)の3つのグループに分けてある。

まず、全体を見ると、「熱心派」はすべての面で他の2つのグループよりも、顧問との関係が充足的である。とりわけ指導技術に対する評価の差は、「とてもうまい」と「かなりうまい」を合わせてみると、「熱心派」42%、「ほどほど派」25%、そして「不熱心派」18%とかなり大きな違いがある。

さらに「熱心派」には親のあついはげましがある(45%)が、「ほどほど派」や「不熱心派」には、それほどの支援は届いていないようである。

つぎに、「熱心派」には、練習や試合の後などで、外で飲みものなどを顧問からおごられる

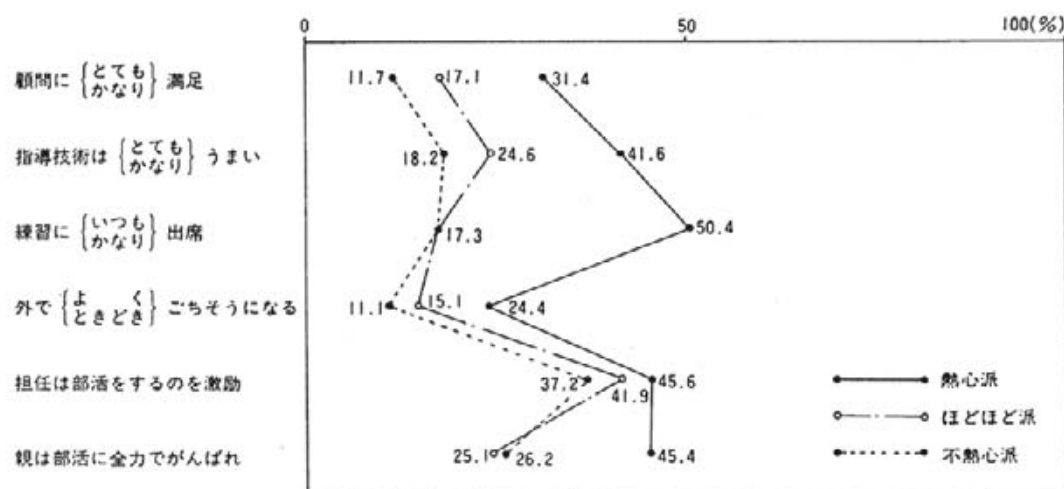
機会も多く、顧問との接触が親密になっているが、「ほどほど派」や「不熱心派」には、当然のことながらそういったチャンスにも恵まれていない。

ただ担任によるはげましは、「熱心派」の方に大きいとしても、親のはげましよりは「不熱心派」にも届いており、生徒に対するある意味での配慮がうかがえる(熱心派46%>ほどほど派42%>不熱心派37%)。

顧問への満足感は、熱心派といえども充分であるとはいえない(熱心派31%>ほどほど派>17%>不熱心派12%)が、とにかく顧問との関係をつくるためにも、部活動に出ていくことがすべての意味で第一条件となっているのである。

とはいえ、部活動をする高校生にとって、最も気がかりなのは学業との両立の問題である。部活動をしたい気持ちは充分あるのだが、成績がふるわず、教師や親の目が気になって、結局部活動はあきらめる結果になるケースは多い。そのような時に、周囲の人々が生徒にどのような態度をとるかによって、その生徒の学校生活の内容は大きく違ったものになってくる。つまり、なんとかして勉強と部活動を両立させるようなやる気を出させて、かん

図Ⅲ-2 部活動への出席度と評価





ばらせるのか、それとも勉強か部活動のいずれかの一本に絞ったかたちで終わらせるかである。しかしこれまでの多くの事例は、後者の場合には勉強への集中力がともなわず、結局のところ学業不振に陥る傾向を物語っている。

親や担任の部活動に対する態度は、部活動を優先している者や両立している者によってどのように変わっているか、を調べたものが表Ⅲ-5である。

表から明らかなのは、第一に、運動部、文化部ともに「両立」型の生徒は、顧問に対して不満が大きいことである（「不満」：運動部58%、文化部55%）。他の「部優先」型、「普通」型が、一応は顧問に満足感をもっているのと顕著な差である。むろんここでは、その理由を詳らかにすることまではできないが、部活動の中で「両立」型生徒にとって、顧問のあり方に問題が残っていることを指摘しておきたい。

第二に、部活動に対する親の心情について

は、すでにふれてきたことだが、勉強のさまざまなげにならない範囲でがんばってほしいという気持ち根強いことは明らかである。しかし、運動部の「両立」型生徒に対してだけは、「全力でがんばってほしい」（48%）と強い期待をあらわしている。

最後に、担任は部活動の教育的意義をそれなりに評価し、生徒に向かってはげます立場に立っている。とりわけ、「両立」型生徒に対しては、「部優先」型生徒以上に、はげましの声は大きいようである。一方、運動部の「部優先」型生徒に対しては、「ほどほどに」というプレーキをかけるのも忘れていない。

結局、生徒の部活動をめぐっては、顧問、担任、親の力学が働いており、生徒は其中で自己の将来の進路と勉強をはかりにかけながら、部活動への意思決定を余儀なくされている。したがって、部活動を通して出会う顧問教師のあり方は、こうした意思決定を左右する大きな影響力をもっていると言えよう。

表Ⅲ-5 生徒のタイプと教師、親の部活動評価

(%)

タイプ	評価	顧問に		担任は		親は				
		満足	不満	はげます	ほどほどに	全力でがんばれ	ほどほどに			
運動部	部優先	52.2	>	47.8	39.4	>	33.0	29.1	<	60.9
	普通	55.3	>	44.7	43.1	>	26.2	34.8	<	59.3
	両立	41.9	<	58.1	43.0	>	22.1	48.1	>	42.3
文化部	部優先	60.6	>	39.4	40.5	>	27.0	24.3	<	65.0
	普通	50.7	>	49.3	39.0	>	24.2	22.2	<	68.2
	両立	44.7	<	55.3	44.4	>	21.8	22.9	<	65.1

注) 1. 帰宅後の学習時間によってタイプを分けた  
部優先「30分以内」普通「30分～2時間」  
両立「2時間以上」

2. ( )は肯定、(○)は否定で有意な最大値

## 第IV章 高校と中学の部活動の比較



### 1. はじめに

この章を始めるにあたり、高校と比較する中学校の部活動の特徴について見ておこう。以下は『モノグラフ・中学生の世界vol.14-中学生の部活動』（福武書店1983年）の考察にもとづいている。

部活動が中学校生活に与える影響は大きい。特に運動部の場合、活動時間は長く、顧問教師やクラブの仲間とさまざまな人間関係を結び、自己とのたたかいを経験し、喜び、悲しみ、悩み、苦しみを味わい、授業以上のかかわり、充実感がある。

中学生たちは、理想的な部活動の姿として次のような像を描いている。

○先輩、後輩のけじめは大切にすが、活動の中で学年に関係なく実力本位にする。

○試合に勝つことだけを目標に能力のある者だけを優先した活動でなく、能力が低くてもやる気のある者は仲間として共に活動していくような部活動にする。

○指導者の厳しい態度は当然であるが、選手養成だけのための活動にしてほしくない。

○部活動のため成績が下がらないように学習と両立できるような部活動でありたい。

また入部動機は、「選手になりたい」（18.3%）というより「好きだから」（70.4%）であり、「厳しい部」（4割）より「楽しい部」（6割）を望んでいる。以上のように中学生たちは、好きな部活動を楽しみたいと考えているのである。

## 2. 高校の部活動と中学の部活動は、 どこが違うか

—高校の部活動は大会出場をめざし日々精進する高校から、マイペースで部活動を楽しむ高校まで、その活動状況は千差万別である—

### (1) 活動内容から見た中学と高校との違い

—費用がかかり、ときには進学・就職に有利に働く高校の部活動—

ここでは中学と高校の部活動を比較するために準備された10項目の回答結果を中心に考えてみた。この結果をまとめたのが図Ⅳ-1である。さらにこの結果を分析しやすくするため、次のA-Dの4種類のグループに組み換えてみた。

- A：回答率が高いもの…(とても+かなり)の合計が50%を超えた項目
- 〔高校〕
- ①練習が厳しい……………66%
  - ④部活動にお金がかかる……………72%
- 〔中学〕 なし
- B：回答率が低いもの…(とても+かなり)の合計が20%に達しない項目
- 〔高校〕
- ⑥親が部活動をすすめる……………14%
  - ⑦勉強を考えずに練習に打ち込める……………15%
- 〔中学〕 ……※は特に率の低いもの
- ①練習が厳しい……………13%
  - ②しっかりしたコーチがいる……………17%
  - ※④部活動にお金がかかる……………4%
  - ⑧学校で人気者になるチャンスがある……………20%
  - ※⑨就職や進学に有利である……………8%
  - ⑩部員みんなにやる気がある……………18%

C：回答率で高校が中学を大幅に上回るもの

	高校 %	中学 %	倍率
④お金がかかる……………	72	4	19.9
⑨就職・進学に有利……………	47	8	5.8
①練習が厳しい……………	66	14	4.9
②しっかりしたコーチがいる……………	54	18	3.0
③うるさい先輩が多い……………	49	22	2.3
⑩部員みんなにやる気がある……………	41	18	2.2

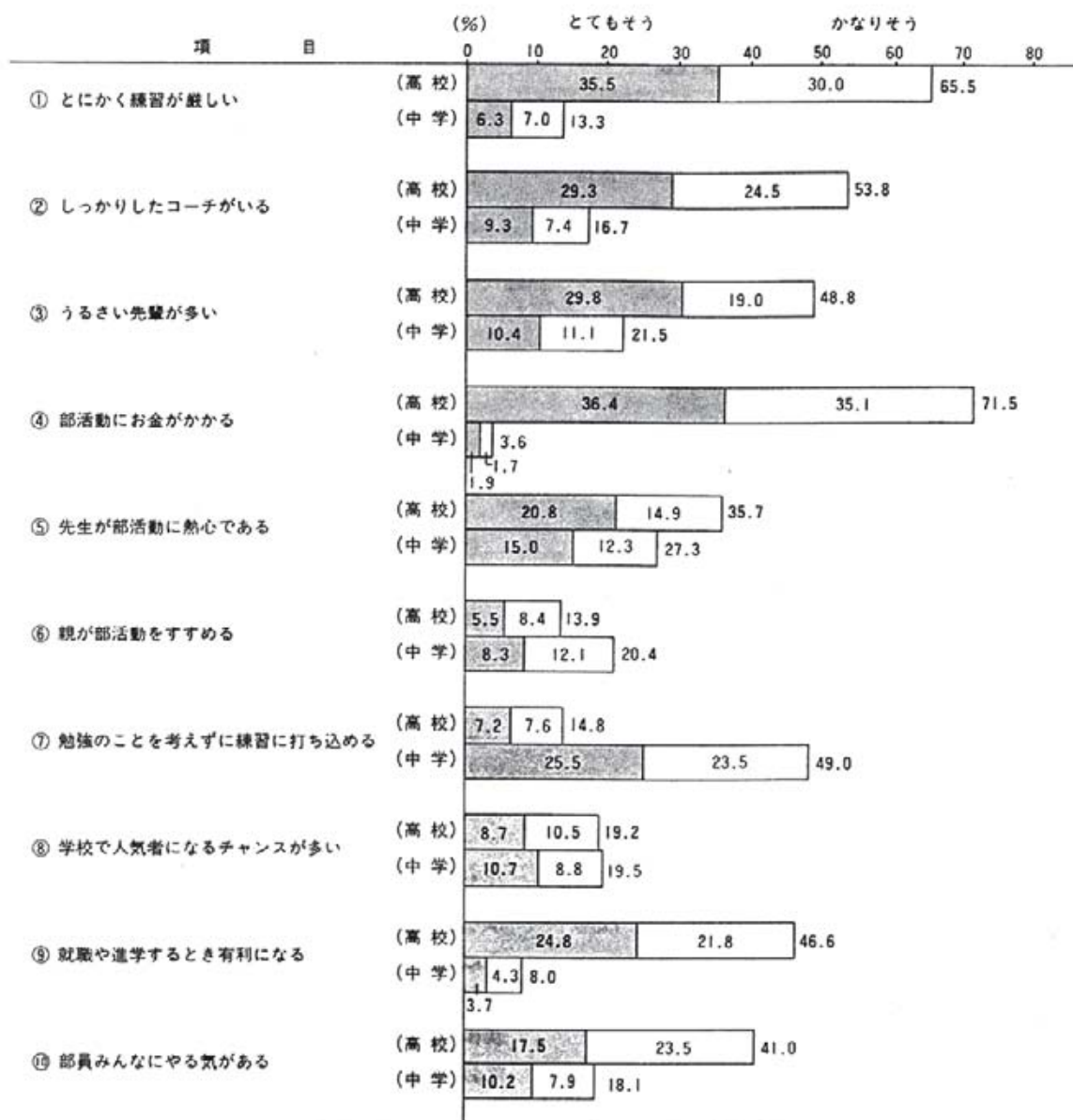
D：回答率で中学が高校を上回るもの

	中学 %	高校 %	倍率
⑥親が部活動をすすめる……………	20	14	1.4
⑦勉強を考えずに練習に打ち込める……………	49	15	3.2

上の分析からわかったことは、大部分の高校生は、「部活動にはお金がかかる」「練習が厳しい」と思っていることである(Aより)。この2点に関しては中学の場合、正反対に「部活動にはお金はかからない」「練習は厳しくはない」という答えが出ている。ここで、高校のほうがなぜ「部活動にお金がかかる」のか。運動部の場合、中学に比べて全国レベルの大規模な大会が多くなり、それにともなう対外試合が多くなるためであろう。ただ、この場合でも、すべての高校で部活動にお金がかかるというわけではない。それにしても、中学のときよりお金がかかることは間違いない。(A、B、Cより)

つぎに、中学のほうが大きい率を示している項目のうち、「勉強を考えずに練習に打ち込める」場合については、高校入試とは比べものにならない規模と質・量を持つ大学入試を1年半後に控えている高校生にとって勉強を忘れて部活動に熱中できる余裕は生まれにくいであろう。むしろ、それができるのは特別

図Ⅳ－１ 中学校の部活動と高校の部活動の比較



注) (高校)：高校のほうが「とても」「かなりそう」と答えた%  
 (中学)：中学のほうが「とても」「かなりそう」と答えた%

なグループといえよう。したがって、中学の部活動のように、高校の部活動は学校生活における緩衝剂的役割にはなりにくいといえよう。(B、C、Dより)

(2) 高校類型によって生じる違い

高校は中学と違い多様化しているので、部活動の内容も学校によってかなり違う、したがって平均値だけで判断するのは危険である。そこで、高校類型別(公立か私立か、スポーツ校か進学校かの別による3類型、詳細は第I章5ページ参照)に、運動部熱心な生徒と文化

表Ⅳ－１ 中学校と高校の部活動の比較×部活動別×学校類型別(男子のみ)

高校のほうが「とてもそうである」の割合

(%)

	運動部 熱心			文化 部		
	私立 スポーツ校	私立進学校	公立進学校	私立 スポーツ校	私立進学校	公立進学校
サンプル数	207名	107名	147名	115名	106名	66名
とにかく練習が厳しい	67.6	37.4	37.4	46.1	22.6	15.2
しっかりしたコーチがいる	59.4	33.3	27.7	44.3	9.5	13.6
うるさい先輩が多い	63.0	34.6	23.1	39.7	19.0	19.4
部活動にお金がかかる	59.1	37.4	27.5	43.2	28.3	32.8
先生が部活動に熱心である	59.2	30.2	18.8	21.2	9.4	7.5
親が部活動をすすめる	13.7	3.7	4.1	4.3	2.8	0.0
勉強のことを考えずに練習に打ち込める	20.8	9.3	9.4	7.0	7.5	6.1
学校で人気者になるチャンスが多い	15.1	12.3	2.7	10.3	3.8	9.0
就職や進学するとき有利になる	51.7	28.6	8.2	34.2	17.0	4.5
部員みんなにやる気がある	36.2	20.6	22.8	17.1	12.1	10.8

( )印最大値)

部の生徒（ともに男子のみ）の意見をきいてみたのが表Ⅳ－１である。

全体に、文化部より運動部の方が中学時代の部活動との違いを強く感じていることがわかる。それだけ高校の運動部は高度になっているのである。

次に同じ運動部(熱心)でも、全国大会をめざして毎日練習にはげむ私立スポーツ校の生徒と、あくまで勉強との両立をはかりつつ部活動に打ち込む進学校(公立、私立とも)の生徒では、中学校の部活動との違いについての感じ方が違っている。表Ⅳ－１にあるように「練習の厳しさ」から「部員のやる気」に至るすべての項目にわたって、私立スポーツ校の生徒は、中学時代との違いを如実に感じている。つまり、私立スポーツ校の生徒にとって高校

の部活動は中学校の部活動に比べ、熱心な先生や先輩がいて、練習は厳しく、お金もかかるが、部員にやる気があり、就職や進学に有利になると考えられている。一方、進学校の生徒は、中学校と高校の部活動の違いをそれほど感じていない。楽しみあるいはレクリエーションとしての部活動をやる分には、高校も中学校とそれほど違わない。とはいっても、全般的には中学校と高校とでは、部活動の質が、かなり違うのである。

以上をまとめてみると、高校の部活動では「勉強のことを考えずに練習に打ち込める」割合は15%と中学より低いにもかかわらず、練習が厳しくても、それに耐え、やる気も充分であるのはなぜだろうか。これは、図Ⅳ－1

で示す通り、全国大会レベルの試合で優秀な成績をあげれば、その技倆、努力を買われて就職や進学に有利に働くというメリットがあるのもその大きな理由の1つであろう。ここ

のところは中学の部活動には見られない部分であり、また高校によって部活動への取り組み方に大きな差の見られる原因でもあろう。

### 3. 高校入学後、 どのように部活動にかかわっていくか

——部活動参加者が減り、途中でやめる者が増え、中学時代の全員参加型が大きく崩れている——

#### (1) 中学時代の部活動参加者の行方

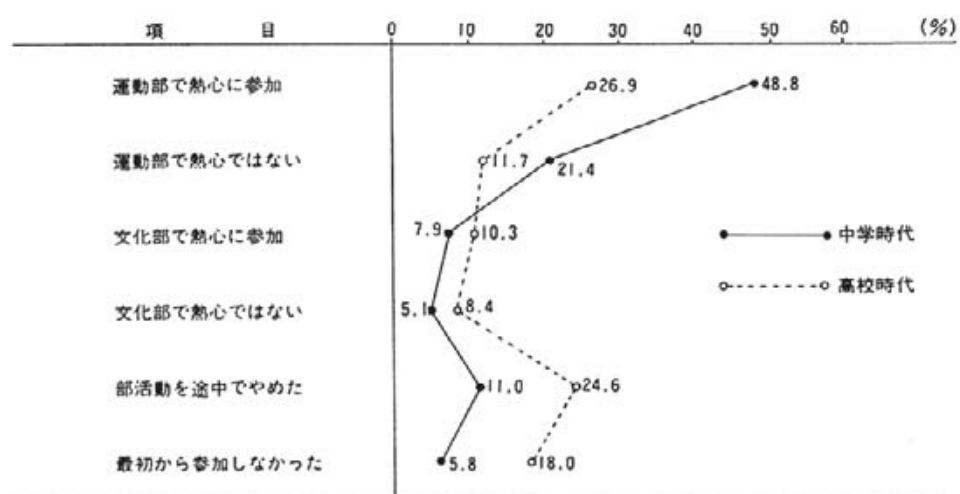
これまでは中学と高校の部活動について、その内容を中心に分析を進めてきた。しかし、これだけでは部活動参加者が高校へ進学したあとで、どのように移っていくかは不明である。つまり、運動部で熱心に活動していた者はそのまま高校でも運動部で熱心にやっているのだろうか。中学のとき不参加であった者は高校へいってもやはり不参加なのだろうか。

まずはじめに、中学時代と高校生になってからの部活動参加状態を比較してみたのが図IV-2である。

中学時代は83%が、何らかの部活動を継続してきていたが、高校に進学したのちも続けている者は57%に減ってしまっている。特に不参加者の割合は6%から18%へと、約3倍にも増加し、途中でやめた者を含めると、中学校の17%に対し43%と、2倍以上にもなっている。なぜなのか。この理由を知る手がかりとして、前にあげた中学校と高校の部活動の違いを思い返してみたい。

「楽しみで参加していた」中学時代の部活動

図IV-2 部活動への参加と活動状況(高校と中学の比較)



とは違い、運動部では特にクラブの名にかけて(伝統があればなおさら)、時には学校の榮譽を背負って勝負を争う高校の部活動では、なまはんなかぬ気持ちではつとまりにくいはずである。その辺の事情が「練習が厳しい」「しっかりしたコーチがいる」「うるさい先輩がいる」「部員にやる気がある」などの項目で中学の数字を大きく上回っていることから説明できよう。そのようなわけではじめから参加しなかった者や、とても続かぬと途中でやめた者が増えたのではなかろうか。

つぎに、中学時代に参加していた部活動と高校に進学してからの部活動参加との関連を見てみよう。

表Ⅳ-2に示されているように、中学時代に運動部に入っていた生徒が高校の運動部に入る割合は44%で、それは熱心に参加していた生徒の方が多い。中学時代に運動部に入り熱心にやっていた生徒でも、高校へいくと約1割が文化部へ、約4割が不参加になっていることに注目しておきたい。高校の運動部はそれだけ練習が厳しく、中途半端な気持ちでは参加できないのである。中学時代に文化部に入っていた生徒は、そのまま高校でも文化部に入る傾向があり(47%)、中学時代の部活動からの継続は文化部でも多く、中学時代からの部活動への指導の大切なことをこのデータは物語っている。

表Ⅳ-2 中学時代と高校時代の部活動の推移

(%)

中学時代 高校時代		運 動 部		文 化 部		不 参 加 (77名)
		熱 心 (445名)	不 熱 心 (108名)	熱 心 (26名)	不 熱 心 (15名)	
運 動 部	熱 心	36.5	20.2	13.1	11.6	18.7
	不 熱 心	11.2	16.5	5.5	7.8	11.7
		47.7	36.7	18.6	19.4	30.4
文 化 部	熱 心	6.6	7.5	38.2	16.3	9.7
	不 熱 心	4.8	8.8	15.1	20.1	11.4
		11.4	16.3	53.3	36.4	21.1
不 参 加		40.9	47.0	28.1	44.2	48.5

## (2)部活動の楽しさ、苦しさ、厳しさ

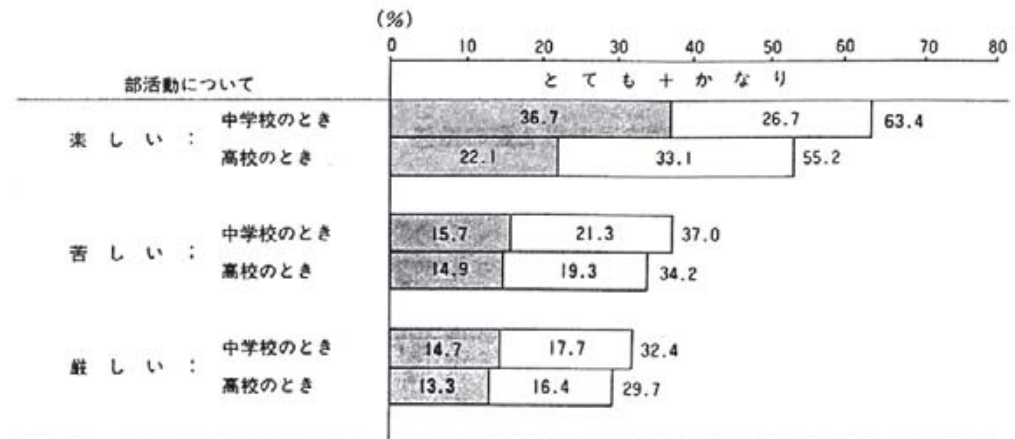
中学校から高校への進学にともない生じた部活参加者の推移はわかったが、生徒たちは、部活動で感じる楽しさ、苦しさ、厳しさは、中学と高校では違うのであろうか。

図Ⅳ-3は、上記の3点について、中学校と高校とを比較したものである。いずれの項目でもきわだった差はなかった。その理由の1つは、次のようなことであらう。高校で運

動部をつづけるメンバーは、好きか、目的があるかで、練習は厳しくとも、部活動そのものを楽しく感じ、苦しさも厳しさも、さほど気にならないのであろう。

これが実感であることは、調査の中で「楽しい」という回答が、中学・高校とも50%を超えていたことから言える。このことは大変大切なことで、やはり基本的には「部活動というものは楽しんで参加するもの」だということ、証明されたような気がする。

図Ⅳ-3 部活動で得た感じの比較





## 第V章 高校生にとって部活動とは



### 1. 部活動に関する意見対立

現在の高校の部活動のあり方をめぐって2つの意見の対立がある。1つは、ほどほどに部活動をやりながら、「いい大学」をめざして受験勉強に切りかえるのが好ましいというもの。もう1つは、体育系の部に入って、甲子園野球に代表されるように全国大会での勝利をめざして、授業以外は部活動に全精力を打ち込む高校生像を理想とするものである。

今回の調査対象校9校の中には、甲子園出場経験校3校(A1、A2、C3)が含まれる一方、進学校としても知られる学校も入り、上記の意見対立を考察するデータが豊富にそろっている。

最初に、高校生の部活動のあり方について

の12の意見を提示し、5段階(とても賛成、かなり賛成、どちらともいえない、あまり賛成でない、ぜんぜん賛成でない)で答えてもらった。

表V-1にあるように、全体的には6割以上が「実力で代表者を選ぶ」、「楽しくやることが第一」、「部活動と勉強との両立をはかる」に賛成している。この3つは部活動の基本条件ともいえそうで、どれか欠けると退部したりさぼったりする要因となっている。一方「スター選手の養成」、「学校代表の部に特別補助を出す」、「部活動は卒業まで続ける」ことには賛成派も3割台に減っている。また実力主義、楽しさ中心、勉強との両立を標榜しなが

らも、5割の者が「教師の理解と援助」を求め、スポーツに打ち込むなら「国体やインターハイの代表」になれるよう努力すべきだとしている。そのためには、多少のしごきは必要だし、かぜ気味でも練習を休むのはよくないと4割前後の者が考えている——と概括できそうである。

性別では、運動系の部活動に関して「厳しさ」を求める率が男子側に高いことが目立っ

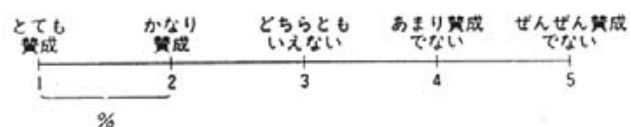
た他は、特に大きな差異はない。

つきに、部活動に打ち込んでいる者（熱心派）と、ほどほどの者（不熱心派）と、参加したことなし（生徒は「帰宅部」と呼んでいる）の考え方を見てみよう。圧倒的に運動部熱心派がどの項目にも賛意を示し、1つだけ「部活は楽しくやる」ことには最小値を示しているのが注目される。文化部熱心派が「楽しさ」や「勉強との両立」で最大値を示して

表V-1 高校生の部活動観(とても賛成+かなり賛成)

(%)

質問項目	全体	性別		学校別		部活動			
		男子	女子	私立	公立	運動部熱心	運動部不熱心	文化部熱心	参加したことなし
1. 学年より実力で選手や代表を選ぶべきである	66.1	68.8	59.1	72.0	> 57.3	(69.8)	57.5 ▲	63.7	65.5
2. 部活動は、まず楽しくやることが第一である	63.0	62.7	63.8	59.8	< 68.0	57.2 ▲	63.0	(73.3)	60.3
3. 高校の部活動は、あくまで勉強との両立をはかるべきだ	60.0	60.0	60.1	59.4	61.0	65.3	52.3 ▲	(68.6)	54.3
4. 先生は部活動にもっと理解を示し、援助すべきだ	51.4	51.5	51.1	49.6	54.2	(70.7)	48.8	60.9	35.9 ▲
5. 部活動(特に運動部)をやる以上、国体やインターハイの代表になれるよう努力すべきだ	51.0	55.9	> 38.2	59.4	> 38.2	(68.7)	34.1 ▲	42.3	47.2
6. 入部したからには、塾や予備校のために練習を休むのはよくない	43.6	46.1	> 36.9	45.5	40.7	(63.3)	29.9 ▲	40.3	34.8
7. 多少風邪がみでもがんばって練習に参加すべきだ	38.0	40.7	> 30.7	41.8	> 32.2	(54.4)	29.8	30.5	29.6 ▲
8. 先輩やコーチの厳しい指導(しごき)は当然である	37.5	38.0	36.2	39.6	34.5	(50.1)	37.0	31.4	28.2 ▲
9. 部活動は卒業するまで続けるべきだ	35.9	38.1	> 28.9	41.4	> 27.5	(49.0)	26.6 ▲	42.6	34.0
10. 学校の代表となって活躍する運動部に対して学校が特別の補助をするのは当然だ	33.1	36.5	> 24.5	37.1	> 27.1	(47.1)	31.1	24.0 ▲	28.3
11. 部活動(特に運動部)では、「スター選手」をつくるべきでない	31.0	32.1	28.1	32.2	29.1	31.4	28.2 ▲	(35.9)	31.1
12. 素質のない生徒は、レギュラーになるのは難しいので早く退部して他のことに打ち込んだほうがよい	11.2	13.9	> 4.0	13.9	7.0	9.3	8.2 ▲	8.5	(13.1)



(>, <記号は10%前後の差のあるもの)  
( ) = 最大値 ▲ = 最小値

いるのとは対照的である。また、運動部不熱心派がほとんどの項目で、部活不参加者より賛成率が低いことは、文化系部活動と違って、

運動部のレギュラーや補欠問題などが絡んだ2年生の不満や挫折感の表れといつてよいであろう。

## 2. 私立校と公立校の部活動

表V-1から、私立と公立で差が大きい項目から順に抜き出してみると

私立校>公立校

- ⑤国体やインターハイの代表になれるよう努力すべきだ (差21.2%)
- ①学年より実力で選手や代表を選ぶべきだ (差14.7%)
- ⑨部活動は卒業まで続けるべきだ (差13.9%)
- ⑩代表となる運動部に特別補助を(差10%)

公立校>私立校

- ②部活動は楽しくやること (差 8.2%)
- ④先生は部活動にもっと理解と援助を (差 4.6%)
- ③部活動は勉強との両立の上で(差 1.6%)となる。

私立校の中には、教育上、経営上特に団体競技の部活動に力を入れている学校が多いので、上の差は当然予想されることである。公立校の場合は、個人競技に近い水泳やテニス、柔道などはさておき、野球、サッカー、ラグビーなどで国体やインターハイ出場は、平常の活動範囲では到底無理だろうというあきらめムードが底流にある。レギュラー選手や代表を決めるのは、実力よりは学年順、まず上

級生、先輩を中心に決められる。厳しさは求めるが、楽しさがそれを上回る。弱い面を先生(指導者)に補ってもらおうとする。国体やインターハイ、ましてや甲子園に出場できる可能性があるなら、卒業までがんばろうという私立校生に比べ、2年生の終わりか、3年生初めには後輩にバトンタッチして受験勉強に専念するという、公立校生の一般的パターンがこれら両者の差から浮かんでくる。

一般に、実力や実績のある生徒を優先し、勝利至上主義をとれば、練習は厳しさを増し、ついていけない部員は自ずと脱落し、淘汰されていく。「一所懸命やれば、いずれレギュラー選手になれる」というのは、実は生徒を引っぱっていくための実体のない言葉である。だから、「みんなでがんばって強くなろう」と、和や楽しさを重視して、上級生や先輩から順にレギュラー選手にしたててゆくだけでは、勝利の味は味わえないのがふつうだろう。本音は落伍者待ち、レギュラーと補欠が残ってくればということになってくる。このあたりが、部活動指導が本務ではないと思っている一般教師(部顧問)の悩みであり、平均的学校部活動の袋小路といえるだろう。

## 3. 部活動と勉学—その両立をめざして—

先に出たモノグラフ高校生'83(vol.9)『高校生活の意味』の中で、普通科高校生の「部活動」について、次のような図式があるのではないかと述べられている。

- ①高校入試では懸命に勉強した。
- ②その代わり、高校に入ったら、勉強以外にのびのびと何か打ち込めるものをやりたい。

- ③生徒会や委員会活動はかったるい。
- ④たとえ1年目は苦しくても、自分の好きなことに打ち込める部に入る。できれば運動部系がいい。
- ⑤卒業後の進路は大学と決めているが、学校の方針でもある文武両道を志したい。
- ⑥勉強との両立が駄目なら、2年生途中で退部してもたいして悔いは残らない。

この図式は確かに表V-1で見てきた傾向と、基本的な点で合致するし、大方の普通科高校の運動部員は、勉強と練習時間の調整に苦慮しながら、このようなパターンを繰り返しているのが実状であろう。これを勉強を縦軸、スポーツ(部活動)を横軸にして、もっと単純に図式化すれば図V-1のようになるだろうか。大部分の高校生はA⇔C、A⇔D、B⇔C、C⇔Dというように、紆余曲折、試行錯誤しながら、自分の高校生活の中での部活動のバランスを考え、生活のリズムを決めていくのが、平均的運動系部員の姿であろう。ここで、この「両立意識」と生徒の勉強時

間との関係を見てみよう(図V-2)。運動系、文化系ともに1日30分以内(実際にはやっていないに等しい)の者に、両立意識がうすいことが目立つ。両立意識がないから勉強しないのか、練習等が厳しくて勉強できないのか簡単には決められない(事実365日休みなしの部活動に明け暮れている部もあるから)。しかし、部活動に熱中しているから、逆に両立意識が強くなるという面もあるはずである。部活に熱心な生徒の中には、部活に不参加の連中に負けたくない、勉強の絶対時間がいつも少ないという意識が常につきまとっているからである。この点に関しては、レギュラー(中心選手)や自称万年補欠といわれる部員も含めて、両立意識はあまり大差ない。(両立意識:レギュラー64%、ときどきレギュラー65%、あまりレギュラーでない61%、レギュラーでない57%)

この節の終わりにあたって、部不参加者の一人(彼は入学以来どの部にも所属したことはないが、ホームルームでの友人は多い)の「部

図V-1 勉強とスポーツの両立パターン

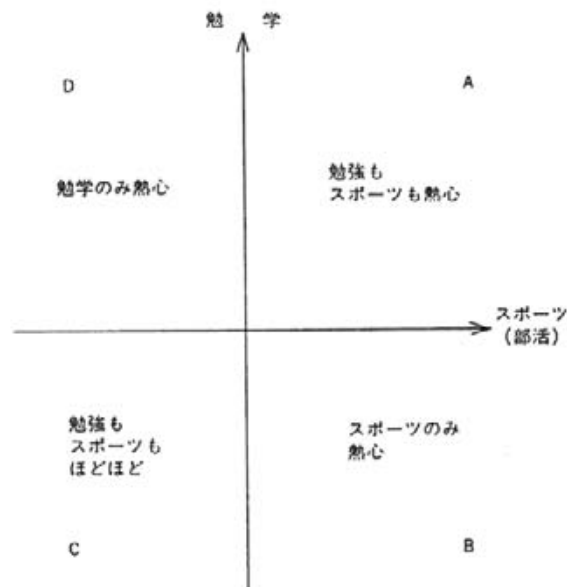
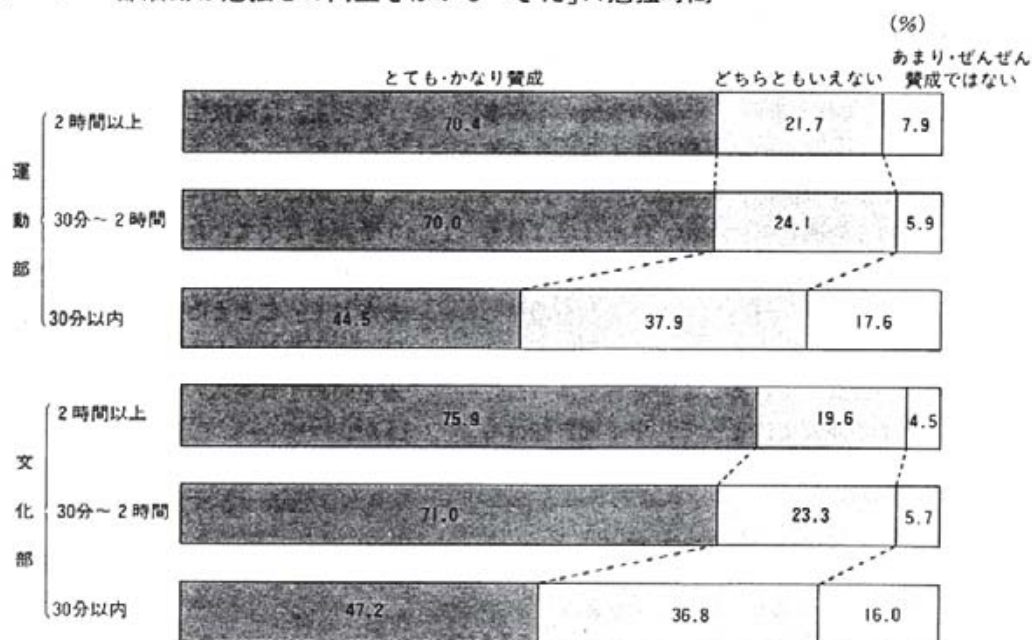


図 V-2 「部活動は勉強との両立をはかるべきだ」×勉強時間



活動と勉学の両立」についての感想を紹介してみたい。

よく高校生活で、部活と勉強は両立するかということが問われますが、勉強にしろ部活動にしろそれほど底の浅いものではないはずですから、両立するか否かについての答えを出すのはナンセンスではないでしょうか。両立という言葉は大変響きもよく魅力的な言葉だと思いますが、はたして軽々しく口にしてよいものでしょうか。一般的に「両立させている」と口にする人は、どちらも「まあまあ」

のところで妥協してしまって、結果的に「まあまあ」で終わってしまうのだと思います。

「両立」= 2つの頂点を同時に極めること。厳しい定義づけかもしれませんが、実際にはこれだけの重みがこの言葉にはあると思います。しかし高校生活には、この両極だけではなく、進路について、恋や友情についても悩み多き年頃なのだから、自分で満足しているのであれば、はたからどういわれようと「両立」しているのではないのでしょうか。ただし、妥協して満足している人は過信以外の何ものでもないことを付け加えておきます。

## 4. 甲子園児をどう見ているか

同じ高校生の部活動ではあるが、高校生スポーツの中で、マスコミに最も派手にとり扱われる甲子園球児の姿は、どうとらえられているのであろうか。4つの意見に対する回答でまず目につくことは男女差である。例えば、

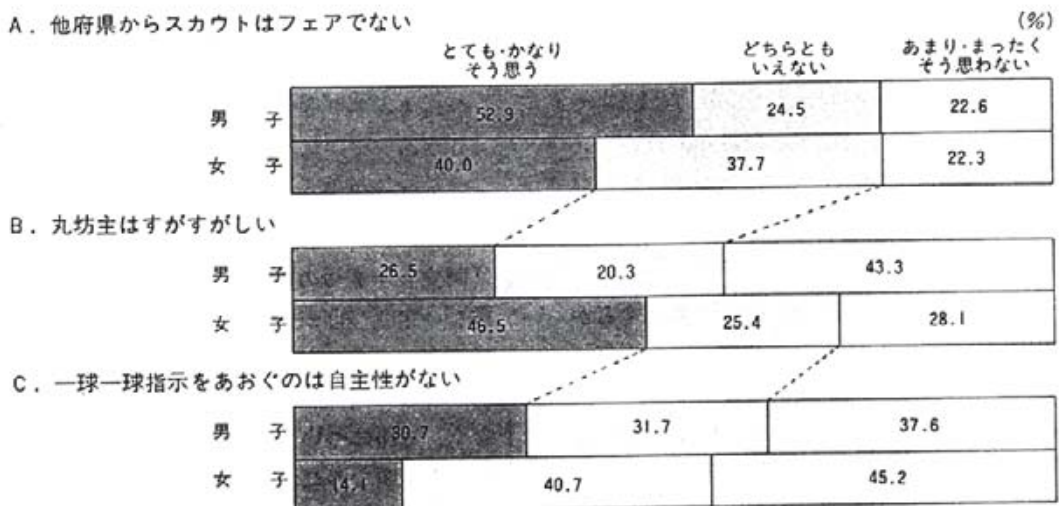
図 V-3 のように、男子は批判的に見ているが、女子は現在の甲子園児を大幅に受け入れている。高校野球を部活動の延長線と考えたり、部活動とは本来自主的な活動であると考えるよりも、甲子園独特のムードや雰囲気、

母校愛とか郷土愛の面で見ているといたら、うがち過ぎであろうか。

学校別、入部者別ではどう差があるだろうか(巻末の集計表参照)。一部の生徒の不祥事のために、公式戦出場を辞退するという日本の責任の取り方には、私立校入部者の41%の者が反対を表明しているが、ほかはほぼ賛否半々であるのが目につく。選手のスカウトの件では、「フェアでない」が多いことを期待していたが、公・私立校を問わず5割以上がスカウトを容認していることが意外であった。ほとんどの高校生にとって、甲子園野球はも

はやいわゆる部活動の延長線上にはなく、特別仕立ての部活動と見ているのであろうか。やや傍観者的な意識が気になるところである。「丸坊主」は高校生のひたむきさ、一所懸命さを表すシンボルとして、おとなは好むにしても、同世代の特に男子は反対であろうという予測をたてていたが、国民的行事と化した甲子園野球ともなると、次の「一球一球指示をおおぐ」こととともに、反対が少ないことは、こうした姿があたり前のこととして、年齢を問わず日本人の心に定着した結果であらうか。

図V-3 甲子園児をどう見ているか



## 5. もしわが校が甲子園に出場したら

大方の高等学校の野球部は、甲子園出場など夢の中の夢、東京の都立高校の場合など、大半は一回戦に勝てればあとは無欲で勝負というのが現実である。しかし、今回の調査校9校中には、ここ数年で甲子園に出場した学校が3校、逆に硬式野球部のない学校が2校あることをお断りしておきたい。

まず言えることは、表V-2等からもうかが

えるように、「なんともいえない」と思う率が高いことである。これは「経験してないから、夢みtainな話だから」といった意識が働いたものと思われるが、全体的に言えることは、公私立を問わず、学校ランクを問わず、入学希望者がふえ、学校全体が生き生きしてくること、逆に予算やグラウンド使用などで、野球部員の特別扱いが心配という声が目立つこと

である。甲子園出場による波及効果（他の部も目の色をかえてがんばりはじめる。体育祭や文化祭も活発になるなど）は、進学校ほど期待してない。しかし、C3校のように甲子園出場を果たした学校で、多方面にそのよい影響が出ていることがうかがえる学校もある。

「甲子園に出場できる」といっても、ただ喜んでばかりはいられない現実がある。この学歴偏重が根強い世の中で、犠牲にしなければならないことも多いからである。甲子園出場といわず、公立校のチームがいわゆる活動範囲内の練習で、国体やインターハイの出場権を得たら、その稀少価値ゆえに、テレビや新聞で紹介される昨今だからである。最近では東京の国立高校、大阪の三国丘高校などその例で、文武両道、進学校という言葉で称賛される風潮があるのも確かである。一方、整った設備

を持ち、豊富(すぎる)練習量をこなして出場する高校を、「あれだけやれば行けてあたり前」「野球しかできない」という目で見るとはならない。おとなが「勉強かスポーツか、勉強もスポーツも」と、はたから目くじらをたてているとき、現在の高校生はもっと醒めた目でこの二者択一の現状を見ているのではないだろうか。

「勉強とスポーツは、どちらも貴いのであって、比べるものではないと思います。球児たちが甲子園をめざすように、受験生が東大、京大をめざしても、なんの不思議もありません。勉強に青春をかけるみなさん。スポーツに青春をかけるみなさん。ともにがんばりましょう!」(S.59.2.25毎日新聞)という中学2年生の投稿記事を引用させてもらって、この章を閉じたい。

表V-2 もしわが校が甲子園に出場したら

(%)

項目	私立校						公立校				
	B1	B2	B3	A1	A2	平均	C1	D1	C2	C3	平均
入学希望者がいえる	52.1	<u>46.6</u>	49.2	76.6	<u>82.3</u>	61.4	57.8	70.1	58.9	53.6	60.1
他の部から予算の配分やグラウンド使用で不平がではじめる	55.7	<u>39.1</u>	52.5	41.9	39.9	45.8	46.0	<u>68.3</u>	41.2	52.6	52.0
学校全体が生き生きしてくる	41.1	55.5	40.0	<u>34.7</u>	50.6	44.4	44.5	45.2	<u>56.4</u>	53.6	49.9
自分の高校に誇りを持つ生徒が増える	43.9	46.6	40.9	41.4	<u>51.9</u>	44.9	<u>39.1</u>	47.3	46.5	48.1	45.3
野球部の生徒が特別の扱いを受けるようになる	44.6	39.8	40.9	49.8	44.0	43.8	39.1	<u>56.4</u>	<u>32.9</u>	49.7	42.0
他の部も目の色をかえてがんばりはじめる	30.7	26.0	<u>20.0</u>	20.6	37.7	27.0	36.6	29.2	<u>41.2</u>	30.1	34.3
体育祭や文化祭が活発になる	28.6	19.9	35.0	21.1	<u>35.6</u>	28.0	24.6	27.9	<u>16.8</u>	24.0	23.3
非行にはじめる生徒が減る	6.8	6.2	<u>2.5</u>	<u>9.0</u>	4.9	5.9	4.7	2.8	2.9	4.3	3.7

(○)印 最大値  
 (—)印 最小値

%